

東京高等工業学校工業図案科における「図案」の概念

—— 英国のデザイン教育との関係を中心に

竹内 有子 (京都先端科学大学)

明治時代、デザイン教育を行う官立学校が立て続けに開校した。東京美術学校の方針を策定したアーネスト・フェノロサ (Ernest Fenolosa, 1853-1908) は、明治二二 (一八八九) 年の開校当初から図案教育を重視し、岡倉天心 (1863-1913) 校長のもと、二九年に至って図案科が設置された。明治二三 (一八九〇) 年に開校した東京工業学校 (一九〇一年に東京高等工業学校へ昇格) では、手島精一 (1850-1918) 校長が三〇 (一八九七) 年に工業教員養成所内に工業図案科を開設し、三二 (一八九九) 年に本科に工業図案科を設置した。

この一連の流れにおいて注目されるのは、ひとつが「図案」という概念の規定である。もうひとつが、「工業図案科」を擁した東工校のデザイン教育である。同校の特徴は、西洋とりわけ英国のデザイン教育法を積極的に摂取して、指導方法を構築していったことにある。その過程は、同校関係者が創設した大日本図案協会の機関誌『図按』の論説記事に現れる。さらに、小室信蔵 (1870-1922) が『一般図按法』(一九〇七年)のなかで理論化した方法論「便化」に発展する。

先行研究では、同校工業図案科の設置から一九一四年の文部省令によって廃止されるまでの教育活動が詳述され、当時の産業振興に関わる社会状況と絡めて、教員らのデザイン指導の概要やデザイン思想が明らかにされてきた。しかし、英語「design」の訳語とされる「図案」概念の生成への問いに応える研究は少ないうえ、「意匠」と「図案」の概念的な関係性も具体的に検討されてこなかった。並びに、『図按』のデザイン・ジャーナリズムを含め、同校がいかに英国の官立デザイン学校 (一八三七年に創設された Government School of Design, 一八六三年 National Art Training School に改称) からデザイン教育の方法論を導入したかについて総合的に論じたものは殆どない。

本発表の目的は、デザイン教育の制度を初期に担った同校工業図案科におけるデザインの受容から解釈の概念の変遷を明らかにすることである。「図案」が芸術上の概念として成立する過程で、如何なる理由で専門教育に必要とされ、その指導の方法が編み出されていったかについて考察する。

「図案」とは、明治初期における内務省管轄の事業から美術学校と工業(芸)学校へ普及した、官製造語であった。同校においては、学科の英語名称「Department of Industrial Designs」の通り、図案は産業製品の形状・色彩・模様に関わる「下図」とされ、その三要素の組み合わせや結合を行う方法が探求されていった。「design」の対訳と用例には振れ幅があったものの、「意匠」が構想の意で対訳された一方、小室信蔵にあって「図案」とは着想・用途・製造過程を内包する図面の意として解されるようになった。